

第Ⅳ章 結 語

文化庁が1968年と1969年に主催しておこなった法隆寺若草伽藍跡の発掘調査は、石田茂作博士が1939年の調査で検出した金堂・塔基壇の掘込地業を、再度確認することとなった。金堂基壇の掘込地業は、やや不整形であるが基本的に東西に長い長方形を呈する。東西長22.00～22.80m、南北長19.05～19.95mである。また、塔基壇の掘込地業は、東西長が15.90mで、南縁部は調査区外にある。ここから若草伽藍は、金堂の南に塔を配する伽藍配置であり、掘込地業の状況から、その中心線が世界測地系で、北で西に23°5'43"から25°2'6"程度に振れていたことを明らかにした。なお、この振れに関しては法起寺下層遺構と筋違道がその振れに合うものの、東院下層遺構は約8°違うことが明らかになっている。

調査区において、地上部分の基壇外装等は後世の削平によって完全に失われていた。また講堂や回廊についても、その遺構は検出するにいたらなかった。ただし金堂・塔の周辺に集中する黄褐色整地土（本報告の第2整地土）が金堂北方域にかけて分布する点は、伽藍の広がりをも想定する上できわめて示唆的である。また調査区全域にわたって地山上面高の最高値がほぼ近似した値であった。この数値は若草伽藍の造営にともなう整地の範囲とその徹底ぶりを如実に示している可能性が高い。

本調査の成果の一つに、土層の堆積状況から金堂と塔の施工順を決定するにいたった点があげられる。すなわち、まず原地形に削平をとともなう整地があって、この後に金堂基壇掘込地業→2回目の整地（第2整地土）→塔基壇掘込地業の順で、施工されていたことが判明した。なお、金堂中央部の版築上にも黄褐色整地土が広く覆っているとする原因の記載については、金堂掘込地業と黄褐色整地土の間に掘削された基壇外周にある溝（SD7040）に多量の瓦が投棄されている事実と、金堂基壇掘込地業版築土と黄褐色整地土が近似しているとの注記から、本報告では、この部分の黄褐色整地土は版築土に含められるべきものと判断した。この理解により、黄褐色整地土がおよぶのは版築土縁辺部に限られており、金堂の版築は掘込地業内から基壇土の積み上げが完了するまで連続的になされたと推定した。それから金堂を建設し、周囲を整地してこのSD7040を埋め立て、そして基壇外装を整えたと推定する。このように理解するとすれば、SD7040中の多量の瓦の存在は、金堂の瓦葺き工程終了後の状況を示している蓋然性が高いことになる。なお、この溝からは単弁蓮華文軒丸瓦（3Bb型式、3C型式）、手彫り唐草文軒平瓦（206A型式、206C型式、206D型式、207A型式、210A型式）、そして多量の丸瓦・平瓦が出土している。これらの瓦は、斑鳩宮の造営が開始された601年前後の年代を与えることができる。

1939年にみつかった金堂周辺の礫敷は、本調査区においても検出された。この礫敷に対応するバラス土層からは14～15世紀に下る土器が出土していること、また調査時にこの土層で覆われた小穴から瓦器の出土が確認されていることから、その性格は不明ながら、礫敷が年代的に若草伽藍と直接かかわらないことが明らかになった。

黄褐色整地土は、金堂基壇の一部を埋めており、塔はこの整地土を掘り込んで地業がなされた。金堂基壇と塔基壇の掘込地業底の標高はほぼ一致するので、地表下にあつて基盤強化の役割をになう土層の厚さは、両者でほとんど変わらなかったことを示している。

塔部分において、塔心礎の据付痕跡は検出されなかった。心礎の高さは、1.36 m以上あるので、仮に柱座を地上に露出していたとしても、基壇上面は、遺構検出面より少なくとも1 m以上あったことになる。なお石材は、弱片麻状中粒黒雲母花崗岩で、法隆寺近辺に分布する一般的な岩石である。

塔に葺かれていた瓦は、遺構から直接に決定することはできない。ただし、分布状況と型式変遷を勘案して、単弁蓮華文軒丸瓦（6C型式、6Da型式）と手彫り唐草文軒平瓦（208型式、209型式）が塔に使用された瓦と推定できる。これらの瓦の製作年代は620年頃と考えられる。

若草伽藍以後については遺構・包含層で時期決定のできるものが少なく、若草伽藍以後の遺構変遷を詳細に示すことはできない。このうち最終的には包含層とされた炭化物層・木炭層で、1-10・11区で集中的に出土した鞆羽口、炉壁片、鉄滓などの鍛冶関係遺物が多量に出土している。これにともなう土器が7世紀後半にあたる可能性があり、若草伽藍との関連で注目される。

法隆寺については、『日本書紀』天智天皇九年条の焼亡記事をめぐって、明治時代以来広範な分野の研究者によって再建・非再建論争がなされてきた。焼亡記事に結びつくような瓦の被熱資料は、今回の調査で出土した軒瓦には見あたらなかった。とはいえ、若草伽藍こそこの焼亡したとされる法隆寺であることは動かない。ただし、焼亡後に再建される西院伽藍の造営過程については、未だ検討すべき課題が多く残されている。今回の年輪年代の分析によって、西院伽藍五重塔心柱の伐採年代が594年に限りなく近いことが判明した。この年代は若草伽藍造営以前にさかのぼるものであることから、若草伽藍と西院伽藍を結ぶ資料となる可能性が高い。若草伽藍から西院伽藍への移行過程を明らかにしていくことこそ、今後究明すべき課題といえよう。（森・深澤）